

史料保存をめぐる国際情勢

— 保存科学国際会議に参加して —

馬 淵 久 夫

一、会議の性格

国際保存科学会 (The International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works, IIC) は、世界七十カ国にまたがる個人会員三千五百人と博物館・美術館・図書館・文書館・大学・研究所など維持団体会員五百を有する国際学会である。文化財の科学的保存を研究する欧米の有志が一九五〇年に設立し、ロンドンに事務所を置いた。事業としては、保存科学の分野で唯一の国際学術誌 'Studies in Conservation' (季刊) とアブストラクト (Art and Archaeology Technical Abstracts, AATA) の発行、および隔年で世界中を廻って開催される国際会議が主なものである。ここで、過去に開かれた国際会議のテーマを羅列してみよう。学会の性格がお分かり頂けると思う。

- 一九六一 文化財保存の最近の進歩 (ローマ)
- 一九六四 染織品の保存 (デルフト)
- 一九六七 博物館内の保存環境 (ロンドン)
- 一九七〇 石造および木造の文化財 (ニューヨーク)

- 一九七二 絵画とグラフィック・アート（リスボン）
- 一九七五 考古学と応用芸術（ストックホルム）
- 一九七八 絵画における木および装飾芸術（オクスフォード）
- 一九八〇 歴史的建造物内の文化財保存（ウイーン）
- 一九八二 科学と技術（ワシントン）
- 一九八四 接着剤と補強材（パリ）
- 一九八六 石造文化財と壁画（ボローニャ）
- 一九八八 東洋美術品の保存（京都）
- 一九九〇 クリーニング・リタッチング・コーティング（ブリュッセル）
- 一九九二 イベリアおよびラテンアメリカの文化遺産（マドリッド）
- 一九九四 予防的保存（オタワ）

このリストでは一見、紙・文書・史料関係の保存に関する発表はないように見えるが、ローマ・ロンドン・ワシントン・パリ・京都の会議で相当数の講演があった。特に、筆者が事務局を務めた京都会議では、テーマが東洋ということで、紙の保存関係が発表の三分の一を占めていた記憶がある。一九八八年の京都のあと、ブリュッセルとマドリッドの会議には出席できなかったが、今年のオタワ会議には出席のチャンスが与えられたので、その模様をお伝えして、文化財保存をめぐる世界の情勢をご推察いただこうと思う。

二、オタワ会議の概要

今回のオタワ会議は九月十二日から十六日までオタワ市内のコンGRES・センターで開かれた。テーマの Preventive Conservation は、日本語としてあまりなじみが良くないが、「予防的保存」とでも訳したらよいのであろうか、要するに「備えあれば憂いなし。文化財が劣化する前に科学的に予防策を講じよう。さあ、どんな方法があるだろうか」という趣旨である。これに Practice, Theory And Research という副題がついている。実践・理論・研究というわけだが、この副題によって中が広がり、保存関係の大部分の仕事が含まれるようになる。現に、世界中からの講演申し込みが多く、半分ほどは落とされたそうである。ここでは、特に文書・史料関係の発表を中心に会議の模様を紹介してみる。

イ、会議の規模

口頭発表四十九（日本から二）、ポスター発表三十五（一）、参加者約七百名（約二十名）。使用言語は開催国を尊重して英仏、それに南アメリカに広がっているスペイン語であった。一応、同時通訳はあったが正確に訳していないと大方の不評を招いていた。恒例によって、口頭発表には質問を含めて三十分が与えられたので、どの講演も落ちついた雰囲気の中で行われた。発表の方法で二、三気がついたことがある。

第一に、スライドも OHP もカラフルで極めて美しく見やすいものが多くなった。数字の表をそのまま出すようなナンセンスな発表は少なかった（多少はあったが）。これは喜ばしい事柄である。

第二は、カナダのブリティッシュ・コロンビアのコンサーベーターの発表で、会場の全聴衆に黄白紅青の四枚のカードを渡し、色別に４種類の答を予め示しておき、各人がよいと思う色を提出し、壇上で紅白歌合戦よろしく色別に投票数を数えるという演出であった。これは少々大げさにいえば、世論調査と発表とを兼ねたやり方である。

問：「現地先住民のある有力な家族が、むかし重要儀式の際に使っていたカーテン（壁掛け）を、文化財となつた今日、儀式の際にむかし通りに垂直に掛けて使うことは許されるべきか」

黄：ノー、所管の博物館が判断すべき。（二十一票）

白：ノー、垂直でなく寝かせるのなら賛成。（六十一票）

紅：イエス、ただし、垂直掛けが招く結果をその家族に十分説明する。（百八十一票）

青：イエス、文化の連続性を重んじ、その家族が保存についての決定権をもつべき。（百五十二票）

第三は、寸劇による発表である。プログラム最後のカナダ文化財保存研究所のスタッフによるもので、博物館内の諸業務と保存の関わりをシステムティックに考察するという、やや思索的内容を対話による劇に仕立てていた。

アンケート方式も寸劇も、われわれを一瞬啞然とさせ唖らせる演出効果はあったが、こんなのが流行り出したらかなわないと、若干後味の悪さが残った。

口、講演の内容

四十九の講演を筆者の独断で分類すると総論八、理論的考察三、実験研究二十五、ケーススタディ十一、研修事業報告二となり、当然のことながら実験研究が多かった。扱われたテーマは、環境汚染・湿度・生物・光などの材料に対する影響が主流であり、その中には次のような史料や図書の保存に関するものが含まれていた。

①マイクロフィルムに対する大気汚染の影響（ロチェスター工科大学画像保存研究室エドワード・ジンら）

コダック・富士フィルムやキャノンのカラープリントなど十二種類のプリント材料を、種々の温湿度条件下でオゾン・硫化水素・二酸化窒素・二酸化硫黄などに晒して材質変化を測定。

②大量の写真資料の保存調査（デンマーク国立博物館イエスパー・ヨンセン）

世界の異なった環境条件下でのネガの変質状況の調査と、保存対策の提案。

③硝酸セルロース材の保管状況の評価（ゲティ保存研究所ミケール・デリックら）

硝酸セルロース試料に対する温度・RH（相対湿度）・酸素・UV（紫外線）の影響を化学分析によって詳細に研究。

④史料保存箱へのMicroChamber製品（紙および板紙）の利用（Conservation Resources International Inc. のウイリアム・ホリンガー）

当製品の有効性の調査研究。

⑤原子吸光分析による大量脱酸処置後の史料の状態（フランス自然史博物館フォレアル・ダニエル）

世界的に最も使われている三種類の大量脱酸法（WEI、TO、FMC、DEZ）によって、束ねた紙を脱酸処理し、内側の紙の全面十三スポットに含まれるマグネシウム（最初の二法の場合）または亜鉛（DEZの場合）の含有量を定量した。結果は、おおむね紙の外側に金属が多く、三法とも処置後の大気汚染を中和するのに有効であると考えられる。（筆者はこの結論には疑問を持っている）。

史料を題材にした講演は以上の五つであったが、今回のテーマの性格から、ほとんどすべての講演が史料保存に関係深いRHに言及し、数えきれないほどのRH図をスライドで見せられた。つぎの二編の講演は史料保存においても常に問題になるRHの理論的考察で興味深い。

⑥RHの再検討（スミソニアン研究機構ダヴィド・エルハルトら）

過去に繰り返し研究されてきた博物館内のRHと保存適性を再度詳細に検討し、材料ごとに危険範囲と注意範囲を図示（まとめを図1に示す）。

RELATIVE HUMIDITY STABILITY ZONES

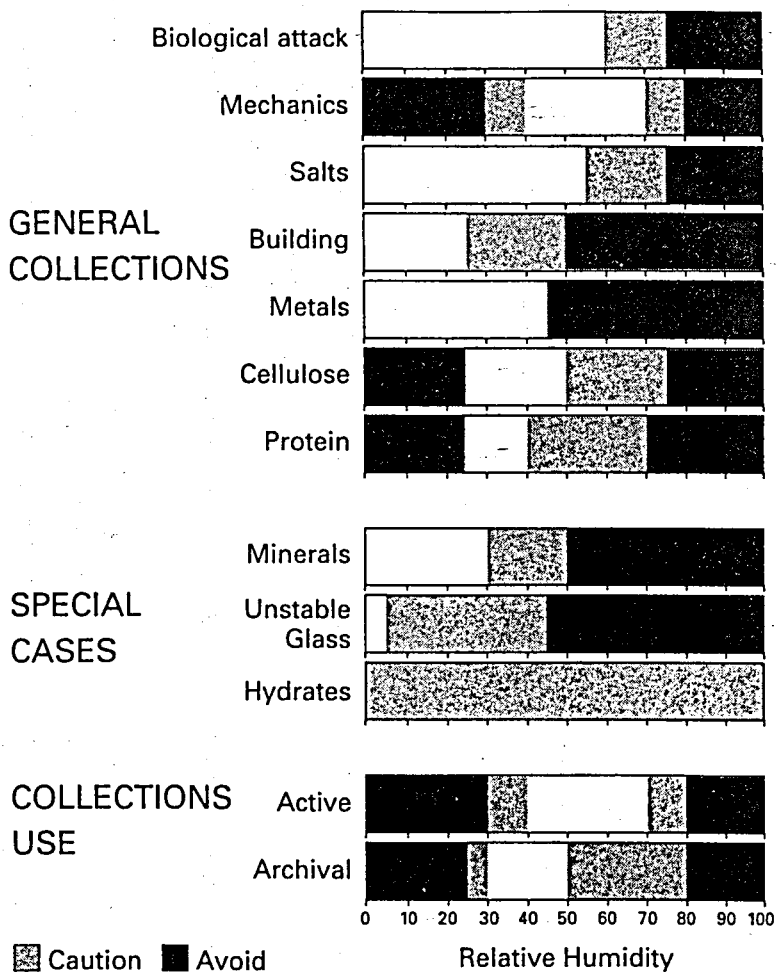


図1 収蔵庫内でのRHの許容範囲

灰色ゾーン：要注意 黒色ゾーン：不可 白色ゾーン：許される
 David Erhardt and Marion Mecklenburg: "Relative humidity re-examined", Preventive Conservation--Practice, Theory and Research, Reprints of the Contribution to the Ottawa Congress (1994). より

⑦博物館内での湿度測定：RHの較正、確度、指示（英国ヨナサン・ブラウン）

現在の湿度計では、計測の原理によつて差はあるが、3-5%の誤差で計れることになっている。しかし湿度計の較正は難しいので、確度には往々にして問題がある。従つて、たとえば、 $55 \pm 5\%$ というような指示も慎重に考慮して出さないと $\pm 5\%$ という数字が無意味なものになる。（この主張は科学者としてもつともではあるが、実際に業務としてRHを測定する保存担当の学芸員には少し無理な厳密さの注文だと筆者には思える。）

RH以外で史料保存に関係する発表には、虫のフェロモンなどによる捕獲や本の表装に使う皮革の保存法などがあつた。

三、施設見学

第三日（九月十四日）の午後は、九班に分かれて保存関係の施設見学が組まれていた。筆者はカナダ国立公文書館（National Archives of Canada, NAC）へのツアーに参加した。通常はそれで終わりだが、虫害研究者の杉山真紀子さんが、以前に留学していたカナダ保存研究所（Canadian Conservation Institute, CCI）にタクシーで連れていってくれたので、幸いにも二班分の見学ができた。後から聞いたことだが、NACの保存研究室とCCIとは人事の交流をしているので、たとえば大量脱酸法の研究でも連絡をとりながら無駄がないように進めているそうである。

NACはアーキヴィストならばご存知のように国立図書館と同居してきたが、近接した場所に新しい建物を建設中であり、二年後には完成する予定だそうである。保存研究室は図書館にはないので、そちらの方も面倒を見ているが、分離してからもその関係は続くとのことであつた。コンクリート三階建てで、最上階にメカニカルフロアで四階をつくり、保存研究室にするようである。文書の収蔵庫としては三百平方メートルの単位が十六セクション予定されて



▲ IIC国際会議ポスター・セッションの風景

発表をする榎本都博士（右）と佐藤昌憲教授（左）



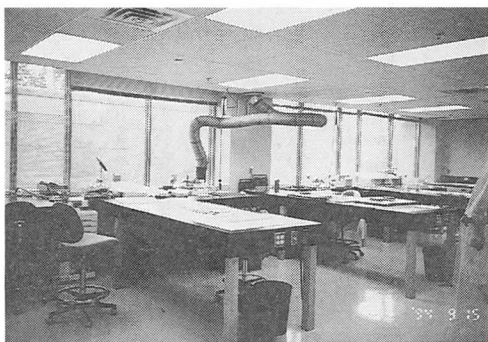
▲ カナダ国立公文書館（NAC）。カナダ国立図書館（NLC）と同居している。

いる。

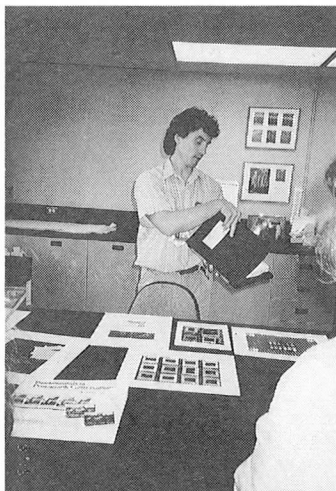
さて、地下を歩いて辿りついた現在の保存研究室では、九名（内八名の常勤）が広いスペースで修復資料を広げていた。油絵・色絵・切手・ポスター・日本の掛軸・写真・ネガ・文書など、すべて十九世紀以降のもので、千年・二千年の遺物を見慣れている東洋の私どもには少々張合いがなかったが、これこそナショナル・アイデンティティによる価値観の違いであることを実感した。しかし、ここは一九六〇年代にリチャード・スミスによって発明された大量脱酸のウエイ・トー法を実行してきた機関であり、その面では世界をリードする研究室である。ウエイ・トー法の小規模実験設備を見学できたのは有益であった。

CCIは、かねてから話に聞いていたが、保存科学と修復研究を集中的に行う巨大な研究所である。扱う資料はやはり近代以降の、日本では民俗資料に属するものが多いが、スタッフは約九十名で、それがすべて保存修復の研究を行っているのであるから壮観である。わが国のように国立文化財研究所の中に保存の部があるのとは違って、全部が保存研究所なのである。どういう発想から国がこのような施設を作ったのだろうか。日本では文化財保存の重要性が絶えず叫ばれながらも目のを見ないことが歴史の若い国で実現している。

見学が終わってグルチー所長が私どもを門の外まで送ってきてくれた。筆者は外交辞令ではなく、心から素晴らしい研究所だと感想を述べた。ローマにある文化財保存国際機関イクロムの理事会で四年間苦勞を共にし、文化庁の招きで日本にも来てわが国の実情をよく知っているグルチー所長は、君の気持ちはよく解かるという顔で、夕焼けの空に向かって一言、サンキュウと言ったのが、いまでも心に焼きついている。



▲ 保存科学実験室 (NAC)



▲ フィルムの保存実験
を説明する文書館員
(NAC)

▼ 文書の補修実験 (NAC)

